隻魚畫漫錄

四

特別
イ4
1919
238

176513

叟魚重漫録

明治四十二年五月上浣起草

所刊書凡七百六十種二千八百三十七卷又五萬頁四百五十萬字

文云
所刊書凡七百六十
種二千八百三十七卷
五萬頁又四百五十
萬字

38- 9034

此印刊行会終業記念として刻したる
ものは半庄の入蔵せし印譜河の
刻也　刊行会本来星閑緑之罰
印を押して聊か記念とするを
云ふ

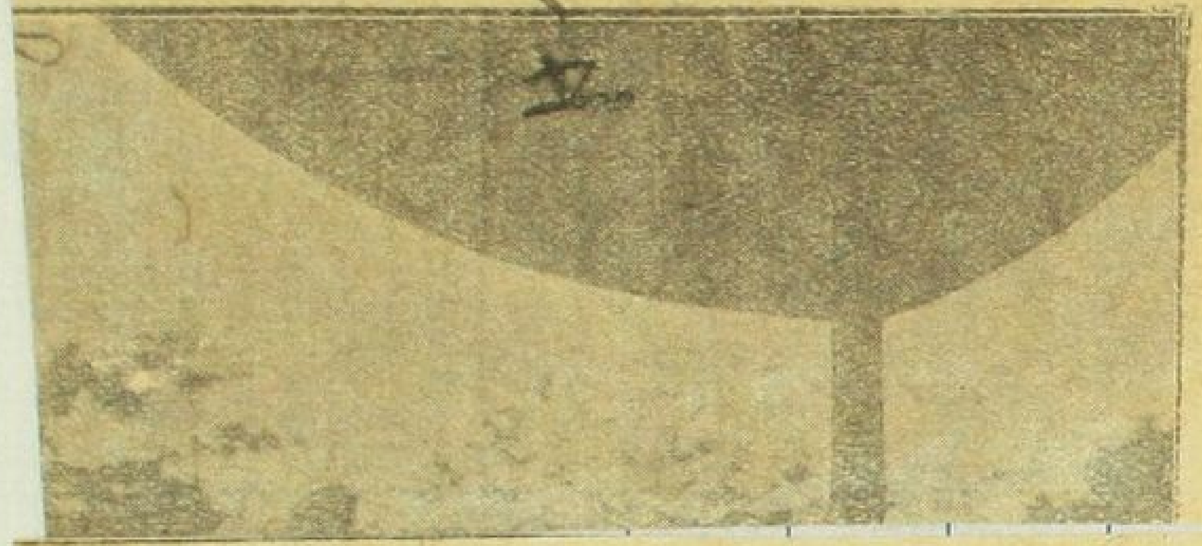
○大丸主人下村正太郎氏に招かれ珠光の青
画乃画を展観す。中に無遥の一人を見送る
其村林下山樵伐木図其一也。余嘗瑞北帰を志し
く展観す辯し為に收終日遊らる。紙本
全屋紙淡彩墨画筆法森原忠一郎あらし

文部謙朝鮮の寄託せる馬圖（厨子）と合せ見
し樹上の枯葉樹を揺ひ、五六人の人を題
す行体なる草をもって踏くしき下宇ある家
収児之十年　壁上詩巡春の節天逸の底
しなる数幅の一なるべし

山北伐木山南多枯枝枯枝作樵採薪
樵云私自知誥朝磯谷尋視暮行
歌帰先雪隠蘚苔迎喧川茅茨結
澗日濯足鬱林間爆衣終年登崚嶒
不復真有危亡倚游与非游莫知是
文徴

硯友社の紀念祭

往昔小説壇の一派に勢力を成して居た硯友社では昨日午後一時から芝の紅葉館で硯友社紀念祭と云ふを開催した、合祀されたは明治の文壇に勳蹟淺からぬ尾崎紅葉、大橋乙羽を始め川上眉山、中村雪後、松廼家綠、佐藤黄鶴、松岡緑芽、安倍春帆、安川翁哉の九人で今年は硯友社創立後恰度廿年に當ると云ふ祭壇には紀念繪端書を安置し果物や菓子を供へ折柄の花を活たのみ極めて質素であるのが反て床しく見えた、岩谷小波氏の開會の辭に次で市島謙吉氏は尾崎紅葉の趣味多方面なりし事創作に苦心せる事業を面白い實例を引いて語り江見水蔭氏は二十餘年前硯友社の連中で演つた「元祖文士劇の話」をしたが紅葉、眉山、乙羽その他の遺族が婦人席に一團をなして居たのは殊に來衆の目を惹いた、餘興には細川風谷の新講談「茶碗割」三遊亭金馬の落語「子寶」三浦琴龍等の尺八、琴、三絃合奏「酒」紅葉館女中の「娘道成寺」中野信近一座の「金色夜叉」栗島狹衣一座の文士劇「大文學」及び活動寫眞や福引があつて宴會に移り十時過散會した、來賓は文士、畫家、書店、新聞記者など百餘名中には紅葉山人崇拜の吉原藝妓おなつ、中華亭の娘など風變りの人々を見受けた、今年からは紅葉祭を廢して硯友社として毎年五月に開催する事になつた相なが紅葉祭よりは反て來衆が少數であつた、落語子寶は圓左が演る筈であつたけれど其前夜頓死したので金馬が代つた、中野信近の荒尾讓介は評判はどこになく高田や村田の足下にも寄れぬとの噂であつたが然し大した熱度であつた、栗島狹衣は所々俳優たるべき技倆を益發揮してるのはエラい（一記者）



梅ケ谷、常陸山[illegible]は晝の一杯機嫌で梅ケ谷[illegible]らリンと塡へて左を張り[illegible]た寄る出鼻を梅の肩透し[illegible]

引の[illegible]掛物
[illegible]を拝る
[illegible]寫眞と
示し紀念の
[illegible]

安永辛丑冬二月東成謝寅写於雪堂

且書□□

この書は大丸屋[illegible]の[illegible]紀念として永く家の寶となすべき者也

明治卅八年五月吉日 [illegible] 記

紅葉祭を[illegible]硯友社創立[illegible]年紀念[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

東京榛原製

なる一銭も出さんでよいと記させる東京朝日の記するに至
るところなる也とすべきものなるべし（五月廿日記）
◯余の京都に於ける開催の全国図書館員
大会式体に於ける講演の大要左の
如し（於京都府会の席へ記し添へし
なんはここ、ゆる記す）
此度は関の東西のハメを外して図
書館協会を組織し今日の盛
なるを見、いつも大会を東京で開き
来りしが今年は是非京都で
開きしあるも此会を見るに至る

これは自分の極めて愉快とする所也
実をいへば京都にて図書館員大会を
催すは尤も当を得たる事也　京都
の地たる図書の研究に好適の地である
ず千年の歴史を有する古帝都　文
化の中心であった古い図書の貴重の図書
もまた有るは元のことの、又附寺院と
云はれる豊富なる貴重な古書
なる、京都の名刹にはなきも
名刹ならざる旧家には我れ知らず
貴重な書物を蔵して居る事である

れば又何千年前の事を識る材料とも
貴重であるばかりでない、京都と歴史的
に重大の関係のあるものもあるので保
存されて居る古文書及び京都の貴重
きもの記載である事実であるが、況ん
や印刷といふ一般に亘つて言ふべき
貴重の多くは経巻を京都で古昔
名寺院の識文や跋語や或は出版
もあり又隆刻して徳川に至つても元
禄以後の出版にも往々江戸で出来
す京都の作としも佳であるが、尚は

又角倉版とか嵯峨版とか云ふものゝ如き
は慶長以来に於て京都の産物と云ふ
ことの出来るものである。一口に云へば京
都は図書の都でもあるとも云へる
ある、天下の珍書も先づこゝに集
まつて来るべきである、それで遂には
謀つて数へれば、其の数つれの多い事京都であ
とうもしくはあるので謂つて差支へなき京都
の蔵これらを捨つべきではない、お
流れを愛蔵して居るのである、自分の
京都の図書研究の捨石の任でも

これは把起すべき場所である。随つて此の土
地に図書館博物館の会の開かれるを
喜ぶのもこの理由である
我のことを許ひあるは東都に於
ける各名刹を勿論各藩家を皆な
悉しくて貴重書を蔵する文庫
とすることも出来る、此の点よりすると
東都並に附近に或る貴子の図書
館も貴重書を蔵する図書館が
林立して居ることが謂くて宜しく
先づあるのである、若し此の[illegible]

文庫の名は其の門戸を開放することと
なつたら異しき思ひあらうて、ある
独学者は都府（りやうの）の公園を作るに
つき一案を立てたのである日本の都
に於ける人民と西洋と共なつて公に
公園を設けしてある甲の家の庭
とその家の庭とを屏墻を隔てて隣
するを換せるに換ひある、若し各戸
墻屏を撤し代るに低くき鉄柵を
以て各戸の境界を画することと
しなさば都府の生命は公園を

されば各戸の公開をなすの中に立つて居る
態度をとられても私は独断でこうしたいと思ふ
事がありますが、従つて此の案に従ひ
此方針を行ひ大図書館の建設案を
立案し〔…〕するとすれば、實行に雑誌
あることであるが決して多くの経費を要せ
ざるものであるから、然らば其の他を
乃ち各名刹古寺旧家の門戸を開放
すれば直ちに大図書館を天下に
早く手紙すれば図書館の出来るのである
ロ然も大金の為めに各名高き寺々が〔解〕

宝を以て我々の為めにその門戸を開放せん
随意に其の貴重の書籍を読むことを許
さん、個人も亦貴重の図書を此の京都
図書館に陳列することを議せん、乃
ち自分の案ないしそれは實地に行はれ
ねと云ふ態度である、唯だ之れを一時的
あるいは範囲の狭い、若し大なる範囲に於
て永久的に門戸を開放せしむると共
の難所のものである、即ち此の案の
方案は今や實行されつゝあるのである、是非
之れを京都に起こす事を得たい

前に言つた牧師の説に傚めて言はゞ支那の人は貴重図書の堆を寄して居る中に生活して居る~~ままままま~~状態である、~~要~~~~日~~切言すれば支那人は図書館の中に住んで居るとも云へるのである。

如斯せは其事を(此事都合)書画に於て改役の図
書類と義信する(本)の図書類を能く記らん
其外物状のことまてにて事
元より
京都志元を以て全図に著すことが出来る相違
○恩田心事記(横綴本)三冊を獲たりし
一冊趣味家手記二冊其子恩田の手記、成
其支那の府事をひき図文を教訓
を記したるより、恩田手記のよろしき書流
元とも古稀なる元役の節とて見へける
つさきなる畜孫月岑のり記一冊を獲し
又文二冊を獲一は捜索り記と表題

一ありしたるは天保三年月岑日各事く
の開始を日載しけることを見るにて、且く
に役味ある修道をもきたり。他の一冊き所
より記りしは以後しのことを志しけり中に達
新たに中々重く見る後覧今継読ん
の記を載す、珍らしく載しける西願の新
其も田立ありしもの其味深きり記なる
其之冊其に架中の珍とするに足る
月岑の日記のくつれの中に春を以て
称せられたる園丁の庭園をうつし
まれなるとするすることを一言しれ

△衰運に傾きつゝある古帝都奈良
ら後興策を図られるにいろ／＼
の工夫を要するは素よりなるへおいゝれ
のことゝきもの其の一策はひとつあら
うと思はれる ゝゝ

る茶湯に於てもこれを名家貴賤
の其人に傳へ遂に流布することゝ
なり
五月九日誌す

○湯瓶切立胡上肩甘草底に於て茶器一
個を擁し桐器甚悪く採る事なれ共如
子と為一盞を急くして盞の良きを天下
第一とし如の瀬あるも出来ざるは未也と
詔抑せしる程なる漆を施す畫家に
上乗ともいひ浮手擬ぬも可也天下和名来
るくてんとる大徳寺傳なるんと

正徳五〔丑〕世譜を某するる　天室宗竹と
大徳寺の第百九十世寛文七年八月廿
六日寂年七十二　謚大光円明禅師
一如ヽ離居人ヽ破笠子と號す玉
室宗珀の弟子也

東京榛原製

○淺山淺氏

○鈴木栄次郎養父鈴木来澤方ニ報ス九
其の所蔵の書画を記す此八三代累世書画
皆並の家也来澤翁自由堂ニ於て蒐し多
く是を散すと云へとも尚其家中の
一ツトシテ白雲洞と題署する應接の室ニアル
叢林松本寺先の山島の翁を掲け額ニアル
獨立の書を張り付あるも出し示す其の書画
皆稀世の珍品也

桃源園　由吾　横生

此房横亭等の額ある

張二水（瑞図）
断簡
栗山楼亭の跋あり
帖ニ仕付ケあり
吉田某ニ見る所ニ見る

米萬鍾筆
太湖石　大幅
北人萬歴の人元章の裔也
友石と號す

陳眉公筆
林壑晩晴図　横巻
高松川大夫寛氏の蔵

陳継儒　書
湛文の跋あり

松竹図　長幅
董其昌評　梅原八右衛門氏蔵　呉伴
主たる人此の松竹を奇蹟と称す

此酒たる喜ぶべきなり

陳氏石徑書

大横幅

其尾に右の題識あり

石徑道人書于玉山之草堂

時庚寅冬暮四月也

□

□

程駿遠

蔡琰帰漢図

程も西廂記の筆者也

東京榛原製

秦山根亭杏邨の数幅あり

其前に悲歌入塞の四字を

題す皆川淇園の書也又巳井

某の跋あり

高松の豪家古画を蓄ふること多く明画

を珍重し明画を求めらる故に趣味指高

うし文化の頃漆器竹器の製に風流を

極め古画も明画を輸入すること多し従

つて又其風を写すもの亦漆器竹器を

此地の風雅の祖なり

○高松の文墨の人に弁ることを拾ふも教育

会大会を標として活気を開きたる讃
人遺墨展覧会あり満堂観て知ることを得る
ものは四五十家を数へる此等の諸名
人の域に達しなるものは一家を成せる者
に従来其人を知るも其の生地を知らざる
名家の三人、近讃岐人なることをば知り得たるは
世の名家を出すの盛んなるを知るべき
三人とは即ち木文山、梶藍洲和尚、細川林
谷なり　梶藍洲和尚は住吉広義と称し祥
福寺の僧、文山は寺家の男にて[illegible]なり
也

市摘となし各家の書画ならびに古画をよく調へし人の
少なきことは勿論市人までよく知らしめ名手の
多くなりし家各職ひとつ覧玩されたる木村黙
老のことき市人とし漆芸家の名を
揚め　漆芸と同時代に徳永顕忠（宗鎮）の親
流を汲みたる、小倉草洲の南蘋流の画をよく
する黒田綾山の五名の人より一々数へて略
あらず作家の多きを左の目録に記して
参考とし

一長町竹石の屏風　書　山田君
一渡邊松窩　書　赤松君
一中川馬嶺　書　陶　福家君
一長谷川秀驥　書　高坂君
一向井舟皐　書　向井君
一兒島竹處　書　松原君

一片山沖堂　書　中野君
一佐々木雲屋　書　山下君
一細川林谷　同　角田君
一宮本敬齋　同　三崎君
一兒玉三谷　書　三谷君
一長町竹石　書　大島君

一 東野飲中八仙
一 三谷石門
一 友部方秀
一 友安三冬
一 長谷川秀驥
一 信海上人の歌
一 西島八兵衛
一 西島八兵衛
一 僧月照
一 寺井越屋
一 森良敬中村の歌
一 松崎濾右衛門
一 山田龍廷
一 菊池五山
一 柴野栗山
一 長町竹石
一 同
一 後藤芝山
一 青葉士弘
一 僧鶴洲

諸大家讃 畫 歌 同 書 同 俗牘 書牘 歌 畫 畫 書翰 書 同 書 書畫 畫 書 同 佛詩

坂出 山田 吉原 大 府中 由佐 府中

三谷君 三谷君 三谷君 松原君 鎌田君 秋山君 柏原君 同君 秋山君 山下君 須賀君 富永君 山田君 藤井氏 加藤君 長町君 同君 藤井君 山田君 法泉寺

一 源英公讃
一 智証大師
一 松平金岳
一 日柳燕石
一 同
一 同
一 竹林上人
一 土肥詩香
一 長谷川峻阜
一 牛塚鳴盟
一 山田梅村
一 中村竹嵓
一 細谷松波
一 日柳燕石
一 中村竹嵓
一 徳永筆山
一 三谷石門
一 後藤漆谷
一 小倉東溪
一 山田梅村

書 同 駒ヶ嶽圖 鐵馬 書 書 同 畫 書 畫 同 書 畫 書 畫 書家合作 畫 書

丸亀 山田

松平家 弘憲寺 庄野君 日柳君 中野君 同君 宮阪氏 山田君 山下君 片山君 小西君 中野君 山下君 鎌田君 小西君 高阪君 荒木君 中野君 片山君 山田君

一 黒田綾山
一 寛玩翠
一 木村默老
一 岡井赤城
一 長谷川峻阜
一 井上感通女
一 藤後漆谷
一 細川林谷
一 佐々木文山
一 松平金岳
一 後藤芝山
一 岡井赤城家代々
一 岡長祐
一 傳教大師尺牘
一 弘法大師の永響喩
一 後藤芝山
一 松平金岳
一 奥村鹿江
一 細川林谷
一 阿部綾山

畫 書 書 双幅 双幅 歌 書巻 墨竹巻 書巻 同 同 書巻 巻 書巻 書 懇由記 臨書帳 歸去來印譜 印譜

山田 府中 志度 府中

安原君 庄野君 牛窪君 三谷君 中野君 辻君 喜岡君 稲毛君 山下君 庄野君 藤井君 弓下君 宮阪君 松岡君 同 藤井君 庄野君 寺島君 富田君 中野君

塙中而書々寛く候ふもの一つとして足らざるなき
唯々二三を録す
林五次 甲斐御嶽のスケッチ
鐵馬一を添ふ

次御嶽(の祠)にて祠中に作くある
小鐵馬は合指動き終に自ら
鐵馬を導つき之れを動しても
子とし受け難く然るその印是
人なり
スケッチの中より林五の(両幅)図像を七
画中より取りあるも
栗山の森祖仙の為に作りたる大字幅
一幅
其々祖仙の猿の小幅を添ふ

栗山後齋の絶幅あり
栗山森祖仙の祖仙を狙仙と改むべき
旨を勧め祖仙終にこれに従ふ
古の篇を即ち此時の作にして其人
の事由を評説す
猿の画幅の中にある祖仙自ら栗
山の諭に従ひ狙仙と改名する旨を
云々とあり
珍らしきもの也
木村蒹葭堂が近藤守重の像を模写
したるもの　これも点睛也

今右ハ諸家文人の事歴を記して遺集
に依ふ
書を風月江と號せし人あり
三岩石川を海名ひの人あり　竹林上人あり
真心四僧にして志気ある人　長谷川秀
篆を勧て愛さし三樹の友人　山田穆村
八唐衛清宗の人　世山書斎　西洋
醫の名法に拾けし蘭社、西嶋八兵衛
八多利に精しき人、寺井櫟居
有職故実に精しき人　岡井赤城
八組練流の立石南也

珎本十二三種陳列しありけるも何れも珎らし
くおぼえけり

旧本芝山自写
大日本史　全部
松平安芸の殿様より献本なり
同書稿之稿本

芝山著　落書自筆
翻采新考流
松平家にも草稿本ある
を見たりしえんとぞんずあ
らず

中山城山自筆原稿
全讃史

菊池黄渓自筆
讃城叔話
黄渓は芝二山の論也

一讃岐別家と薬業の御製を出せり、ここに支
那の名画多く陳列しあり、東京に於て探り
えざるを得ざる印ありて此地に於て多く見る
此地書画の盛なるを感ぜり

一宋人龍共開画

是れ亦市河家渕波氏の蔵幅にて記識
西中一の幅と称するものなり

欵識云
林下茅簷巣鷺還 洞前
雲湿雨龍帰
徴来海岳画
聖與敬閑

元人黄公望幅
米庵旧蔵 同上題

明人徐枋山水
明人李山若書
明人鄒典明山水
明人平原直道書
藍田叔山水
王思任書
王雲章画小幅
これ其の蔵目にて多くあり、然れとも鈴木古暉
にも見たなるもありしかれとも贋なく見ゆあり
まかりに然せしかり

○讃岐高松藩中一日大西行蔵を本国即永上村
に訪ふ大西拜梅と称し篆刻詩書を善くす
香川翁方一の高弟なりと讃村楽亦親交あ
りと回の行ひ紹上の趣のなるも也先兄の詩
集あらしと云ふ人数行刻らさるなく一見感
ぬめぬく所る楊俠ともへども、拜梅国書版
味あるも古版本中数部を出し余の鑑定を
をこふ二三を除きお皆正品と見受けたり
集山家詩杜工部集　五山版
唐秦隠君詩集　宋版
宋景文集　断巻　宋版

金澤文庫本　唐代稿池心冊
披詩　元版
韻府　〃
廣韻　〃
古写本論語
深紙有り　嵯峨清涼寺竟鎮
の華札に依れば五條中納言の
説なりと其雅は二十四五才
の頃の筆也と記あり其雅似
二十六才大低に入在りと古
其の内論語沢山あり云ふべし

印譜類も多く出し示されたれど蘇氏印略
漢銅印叢など全本はまれなり尤物なり

郭允伯松談閣印文　二冊也
郭允伯ハ王漁洋時代の人也
譜中漢印を多く収む汪氏の
譜と譲らさるものなりけるも
業郭氏自筆の考證各印下に
註しあり
先識並王鐸閔書の跋あり
（以上高松氏より借り見しもの）

東京榛原製

拜棋多く印を蔵す其中にて尤も精なるものあまたあり芙
蓉刻無雙を蔵せしと明なる文彭何震の印
のごとき自分の精を得ずとも拜棋阿
部絹刻する所の漱印（文三橋郡人）一顆
を蔵す緒撰題跋の印人良山老の子也
拜棋近く〇〇を作るも文彭の〇〇を写す
彭中の意ゑ石力全ての意を収めたるも
〇大西方ニ古篆識如意古銅印を蔵す沢
珍器也奇ともうけを模し〇〇〇〇
収めて第一を占めしと云ふ

大安寺
金堂

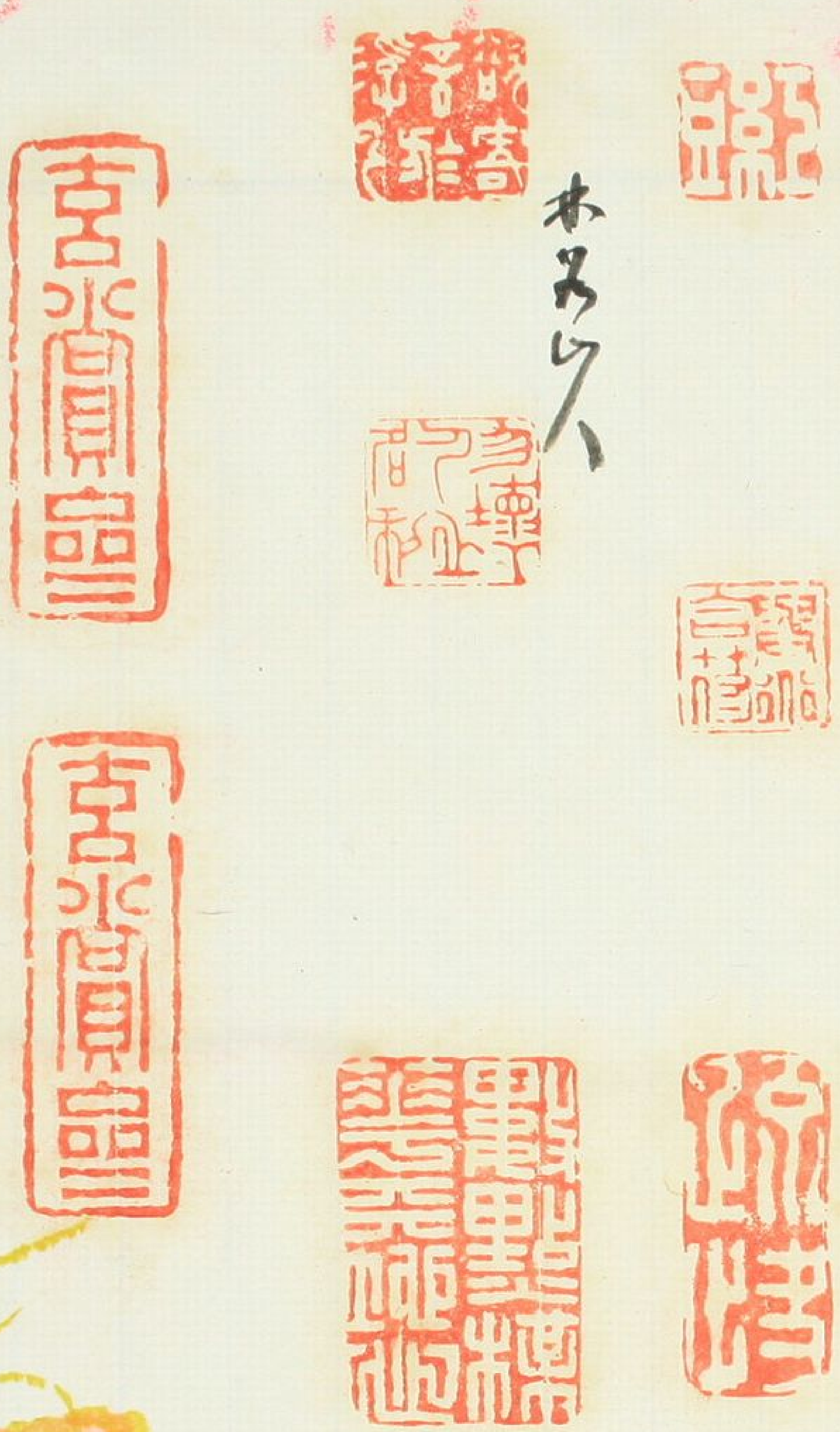
和州大安寺銅壺銘
長樂峴衞入摸

右西晉元康磚從五寸衡四寸五分厚一寸六分

左側有雙行文隸書秀逸似曹全碑

其鉤無鎩廉而不劌以歌
以舞以弗若是折[illegible][illegible]子
之器也　[illegible]

右趙忠毅公
鐵如意銘



木石山人

銅閣女史刻

日本にて印刻を目的のみにて印章家の祖とも称すべき
圖書を捨おもしろ也倣て令印譜を編み
方思ひのみに路を精がてらし殊に唐宋の
印を摹して宋元明より論じ明の伝を
まじえも多く誤りたる所もありしを大に
り自ら筆を執りて其の中より是に倣ひて印譜を
山の鶴亭其の印譜数多あらはし其の後此
記録の印を模して流石に其代家なり称し
列朝印略を編集せし大に禮儀無の
ごときし太郎の印を始めとし高芙蓉印其他
名の印を多く集めたり大作を勤めて文字を

文房八寶

載せたる毎回にけんは重統せしこと（但し紛
らはしきを誤解ゆへこゝに略す　訂正の要
なし）杉田氏ハ清書収念の後後藤芝山
自筆の紛行二十字を書きて各々一二字ずつ
唐紙に書き御勝手に清書しかつ今の相
中の名跡[illegible]和の詩也[illegible]又木村季
明（跋あり役文）林信充林信篤林信言の詩
各一葉を貼りたる皆詩歎しある詩也
又高松ニ藏する素山の作かける於
林の墨蹟一個を貼りたる延寶五年書せる所
の玉蓬城太极つ棟木遺材を用ひて作れる

林信篤

名ハ戇、一ノ名ハ信篤、字ハ直民春常ト称ス、號ハ鳳岡、整宇、拙々翁、徐干子ノ別號アリ春齋ノ第二子、梅洞ノ弟ナリ延寶庚申家ヲ継キ大藏卿法印、弘文院學士トナル享保十七年六月朔日歿ス年八十九、武徳大成記、服忌令、鳳岡林學士集、四書易詩書講義等ノ著アリ

林信充

名ハ愨一名信充、字ハ士厚、後春察ト名ツク號ハ榴岡、信篤ノ子、大學頭タリ寶暦八年十一月十一日歿ス年七十八、續国史、本朝世説、越中孝子傳、越後孝婦傳、詩法蠡測、馴象編ノ著アリ

林信言

名ハ信言、字ハ子恭、鳳谷ト號ス、信篤ノ第二子ナリ五世大學頭ト称ス、本朝事物権輿考、聖堂御成記集録、東武列朝系譜ノ著アリ

其松本氏の祖廟に一株の松あり又之
れと日一の枝を以て作る、玉藻城一抱の如
紀念とするに足る
松本氏は書道の家柄なれは往年役所
地を定むるの日我か家印し其の旧跡次
第を以て士族に與ふるもの[illegible]人
臣の関係親密なるものにして[illegible]
余等[illegible]書道を以て人心
と[illegible]書道を[illegible]と係せ
要へて[illegible]

林信言

[illegible]

林信充

[illegible]

林信篤

市島氏を訪ふ

昨廿一日午后目下來高中なる早稲田大學圖書館長市島謙吉氏を可祝旅館に訪ひ一塲の談話を乞ふ大要左の如し（文責在記者）

松平家所藏古文書

今回余の來縣したるは其目的に於て元來松平家所藏の古文書を整理せんとするにありて右は當主伯爵に於て豫て古文書整理の意思ありしに胚胎す。抑々舊藩三百諸侯のうち水戸の分れは何れの藩と雖も一般に藏書に富むこと例へば加州藩の如き又は當高松藩の如き乃ち其尤もなるものにして、加州藩の如きは當時天下の大藩として暗に水戸家に對抗して盛んに文書蒐集に力を盡したるは能く人の知る所、而して高松藩に於ける藏書の富は何に由來したるかといふに斯は一に水戸家の業を繼いで大日本史を補遺せんとしたる事即ち筆を後醍醐天皇に起し

て孝明天皇に到る間の史を修し所謂列朝要紀編纂の大事業を完成せんとしたる事にありて更に其副因としては右の修史事業に前後して例へは木村季明、後藤芝山、柴野栗山等幾多名儒の輩出したる事乃ち夫れにして二者相俟ちて高松藩藏書の富を造る直接間接の素因を爲せるものといふべき也。

余は昨二十日殆ど終日に亘り舊城内の藏書を整理したるが主要なる書籍は豫じめ書庫の中より引出し置かれたれども後には余自身にて書庫中に入り種々整理につとめたるが伯爵も熱心に半日ばかり余と倶に整理に力を盡されたり。數ある古文書の内最も盛に蒐集されつゝあるは史料記錄（歴史參考書）の類にして禮儀類典五百冊以上の所藏は蓋し世に稀なるものゝ一なるべし。次に家記類乃ち當家に關する記錄の盛大なるは又以て當藩の一大特色として見るべきものか、讃州實錄は續篇とも合して全部五百巻以上の彪然たる大部冊のものにして開祖松平英公より近代に到る一切の事蹟を鄭重綿密に記載しあり。猶諸家登仕錄五十巻あ

り之れは一に讃藩歴代の人物傳とも見るべく外に家譜五十巻整然として累代の系圖一目瞭然たるものあり蓋し高松藩は歴代名儒多く輩出せしを以て家記に由りて一般に當藩文物進化の度を窺知するを得べし。前述列朝要紀は實に高松藩に於て特筆大書すべき一大修史事業といふべく全部二十三冊の中二部だけを書庫中に見出すことを得たるが余は其時に到る迄最早當藩には一冊も影を止めず全部政府へ進獻したりしものとのみ思ひ居りしに圖らず之れを發見し得て快言ふべからざるものありき。抑々列朝要紀は大日本史の補遺として編纂したるものなるより同じく南朝を中心として筆を起し先帝孝明天皇に到りて終る、而して右全部の完修せるは幕末乃ち先帝の御宇にあり時の家老木村默老氏之れを携へて京師に入り關白職を經て進獻せんとするや近衛關白より南朝を中心として編纂したる本書を北朝の御系統にましますの聖上に進獻せんとするには聊か差支ふる節も之れ有ればとて書中種々訂正すべき旨を告ぐ、然るに家老木村默老氏は前記木村季明氏の孫にして才學倶に藩中の雄と稱せられ殊に曲亭馬琴氏と相往來して有名なる八犬傳の大作をすら精緻なる觀察を以て批評したりし程の人物故僅々三ヶ所ばかり訂正したるのみにて無事進獻を果したりと云ふ。然れども這は他に一の原因ありて存す、何となれば國史畧の如き同じく南朝中心の書なるが其進獻に際し多大の訂正を餘義無くせられたると云ふ一に個人の手に成れるが爲めにして然るに右列朝要紀が僅々二三ヶ所の訂正に止まりしと云ふは全く高松藩の勢力ろのものが原因を爲せしに他ならずと云ふべし。所謂異の意味に於ける古文書に到りては比較的新藩に屬するを以て唐本其他の古版は多くこれを發見するを得ざりき。然れども余に於て唯一の發見と考へられたるは五山版の東坡詩集にして本版は足利時代京都五山の僧侶により維持せられたるものにして

本書は諸所五山僧侶の書入れあるよりして徴歴の疑問をだに容る丶事能はず且全部二十五冊の中一冊の欠本だに無きは實に珊中の珊と稱するに足らん。

高松藩先代の書又は編纂に係しものを見るに就中、穆公の手に成りし花鳥草木等の寫生帖は最も多く余の注意を惹きたるもの丶一にして金襴表装全部十二帖より成れるものなるが本帖に於て特色とすべきは總て實物大而も其摸寫の巧妙なる進歩せる今日の石版摺りも遠く及ばさる迄にして全体昔時に於ける此種の寫生は本草家等の家に所藏さる丶書多しと雖も大抵は今日植物學者の研究資料として一葉の價値だに無きもの多きが常なるに反し獨り本書に於ては嶄然として傑出せる事眞に稀有の珍品と云ふの他無し。恐らく平賀源内時代の好尚に影響せられたるものなるべしと信せらる。

余は當日伯爵より特に祖廟の拜觀を許され等身大の御像(古理平の作)を拜する事を得たるが右は余の一身にとりて以て頗る榮と爲す處なり云々。

○高松侯にや偶〻報德會
名公式なる松平伯を介して
余は一場の演説をとふ完
了の事なれども左ちる流
余の演説は他の諸演者
の所説と趣を異にし即
ち多く風刺の言を寓し暗
に内務省を非難するを
事とする此を憤らし二者相
の所説を全然反駁し去
衍せしむ候ありて夫ありと唱

破し大に聴者の喝采を博し然し而諸大家
左の如し
先づ大なる者は近衛家伊勢順照十二三年の此との文
印文家田島木山翁一木直徳翁の紐
父周田伯平説ら等德公の翁を存にし一
以を其化なる事識の為大聴に生し本
上ミなとりん（玉山之文と修之の旅句の此
候なる者を受けなる事ら勤和齋の家
治等の為（其四の文良一印を遠あるとも
る理をも闘金なる顯赤や良一印の之父
のことく讃存のたるるのあまり得たる者

の大事を罵倒し西洋論の紀綱学の迂
遠なることを云々せし事あれどもそのまゝ
に倭述し劣る人が二人の子息を大事なる人に
所謂迂遠の学の道をさゝせたる野蛮の地位
に納めしたるは誠に見つべきものなりと
郷操し次で迂遠物理の格に所謂る勸
総論紀に属する田畑を見て数勝せること
なりを詳説し二十五六年前の既に絶
国すでも初めて来る四国の地に在りし
處に説きたる様をもつてゝ足らざるなりと
言ひ

更にその道を本論に入り余の二字翁の服
すること論として其の人格の上にあると論
じたり稀なる人の方面よりの翁の性格を観察
し醜白翁の性格を各方面より論じ
全く未だ稀のことなしと聖人何れの一角
に於ても崇拝し得べきことを言ひ世
間動もすれば翁を其の方面の
清楚の方面よりを見て他を知らざる方面
あるを非なりと断じ翁の真面目を
流動的の世に保守一方にあらず温厚中江藤
樹派の人のことく解釈するを好む

すてゝのキカン坊なりしと云ふて心服す
る一棒を加ふるとも
其の二書翁の所謂る四大経録を千歳不
磨の説とも其ふを得べし然れども解釈さ
時勢によりて変らるゝもあるべし翁もまた
日の学者に依りて取捨の解釈
をなすべし例へば憲法を解釈する
うぬく自由自在なるを好まず云々を
翁の真傳とは申し難し然るに其後は
義術なきの如きを迷らくは翁の意見
あしくをとも知らぬ我らを却つて翁の学道

ちなりと篤実の意を示さんと体に云へば
愁ひ翁の説を互に承けたる人などの説
をなすとも余其のこころに合はぬ門
の学者自由なる解釈なすに却て翁
四大経録の真諦を得ずならんと
帰するもの多かるべし又由係者道の二書道
を冷罵し
更にこの説を唱へし翁の千統之甘く撥無す
んは今の社会の弊害を矯正すること
得べきも一概にこれを信ずれば世をさる道
おこんとぞ其の社会を害ふるのを道すべくの

言あらん、此に一方ニ報徳会の先生を以
て勤倹を鼓吹しけるより市中を見れは
痛く其の説を聞きて行列する事大騒き
あらし人と元を以って争ひとらんとする如き
う所謂る論語のよろしきを得たる者
と揄揄一書し及されは内務省等より配布
せる印刷物中にも一二宮徳翁の道を
を引用し翁を宣伝せるものあり翁の
清論を勧めるによりて各戸の則を説き
也とを拾閲せることや各三戸より新何本
以上を消費す一の事と一々其古本の回

収をなさしめ小言を云つれ其をひ云ふこと
を翁の真面目なりと誤認し此等の聲
に遂に学者とさへなることもありは人皆
又小規模のことのみならす利益のみ追ひ有
害の所在に陥ることも往々翁の
真面目を誤して頗る瑣事に拘はれ
ることあらずやと論じ
然而翁を崇拝すると共に報徳会を
把るも不一の事なれとも如何のことを鏡と
猶又之を見るも此らされは其結果
しても知りうるときに我の事あるならん

ミ二宮翁の推薦し来りを悦ひぬいや
くらしき之れを写ふと云ふ校るまひ
此全す前篇ひろぐしと嘆くゆ数箇の
絶削新絹を比離し居る

○濱村氏ほ野手神社を以て遠道に随ふて人を
余すところの繪記あるなりとれて使せ親しくを喜
まうし然るに其人の勧めもあるも一日の閑
を偸むも一遊を試むて高格ある汽車に乗じ
ここに二時間を経て至る此土地の古きに
名高き旅館あるも備へたるに若かず

ミ掛ず鉄道へ入り又雅の志留く道の辺に
ミ洋式の旅列館を設け客を旅客す大
雅蘭潤なもの辺りも雨屋さしの事又欠け
とめる野手神社も名沢山上にあるも此
の高格と風雅繕るも遂るなく紀横根
大の山るべし一寸景一と見ると除ても
絵を以て畫するかし而して野手即ち高格飲
至る即ち野手神社の存る下也旅山の風
光を眺る事ちかる名の錦あるも説く千丈
ん人一言の絶景なる要覧しなるも
神社の方向をさし八町なる鉄路石段を

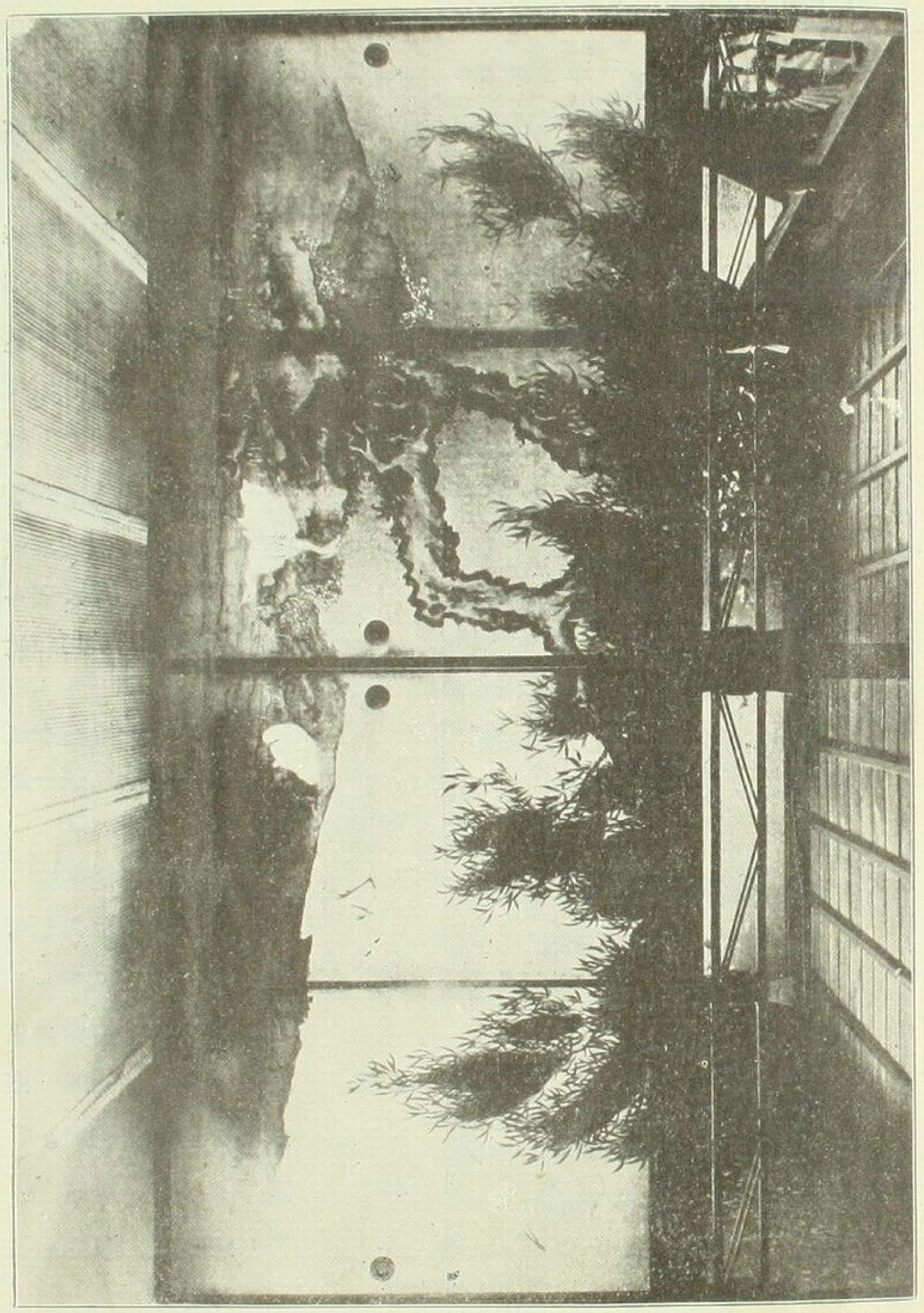
釜らなるを得す両側に浅く四つ内のぬ
き目却実に鋪棟を列し其の長さ六寸ば
迄すに侘倫侘ふんかる視標に添ふ
ゑ大方ハこの也新務子に列なる嵌物の菓子
内よ座着ある名画を観る、これ
をう存て可なしとなる此ゑするなるまのひ氣
付ゆそものしくころとて理可手に浩に得とる
第一の意具なるし、表書院の床端の一室
襖床張付せ座着帯ひゝて銘を書画う
くゆんとも墨絵ふてゆきて雅又の作なる
帳銘端なるるまる次の間の三方襖ます

東京 榛原製

へて用を書画うくえん又墨書画て銘ゝ画て
此れはすべて一種の好みを与ふ事情のゝ
くの容態を画かうとうの内源に臨むて
氣を奉之の圓を宜しく女の座きの間
二方の襖七賢竹林を図す也年程八あるる
賢人の画題を濃墨にて塗抹せしとまる
ゑんとも全くの繪線を経墨居を見す
五言十之ゑを修補するとるの二ん引満なる一
室を二の間とゆゑ竹左不めきうてる是らうし
この上段床佐付るとに墨画淡中の図に
て傑作中の傑作也 此の室の襖ゆるに山

ゐ楼への図あるもせうらんすべし瀑布の図
も保津川上流の奔湍を浮うきさくらしく
激流岩を嚙み岩上の松雪白の飛沫を
游ぐるの状を存する人をして寒暑を接す
るの感思あらしむ、右方岩端ニ皆あ
図寮の遊ぶ入る左岸一代の大悲と號ふ
七間堂一併以半廊ニて金銀を佛るし
楼前の人の部を全図ニ入らしめず、全ての岩
うして好紀を受けて観、観覧を会
るを得たる、坂上表寺院あゆて図奥寺院あ
る其の南端の千光寺岸線の書ける櫓

の図あるも極彩色にも岸線の業かを見
る、遊人は遊ぶ一室あり岸線筆杜氣を憲
くらんは茶業の發展を見す様ニ出て遊中
の景を見ると遊とわまんまも屋下千鳥の
に游足甲足むく混合雨ニ嵐山を望み風
景石枕のおるにあるし可覧とする情を呼ぶ
新緑子を稀し又石磴数百級を登り本殿
に達し一般の者ニ至る吊尾ニ休憩中
一客あるも刺を通しも望みて来の妙
茶を開ひ金を問ニ應じ些の字多くを
聞かしむるしく成るの勝寺住職のあ

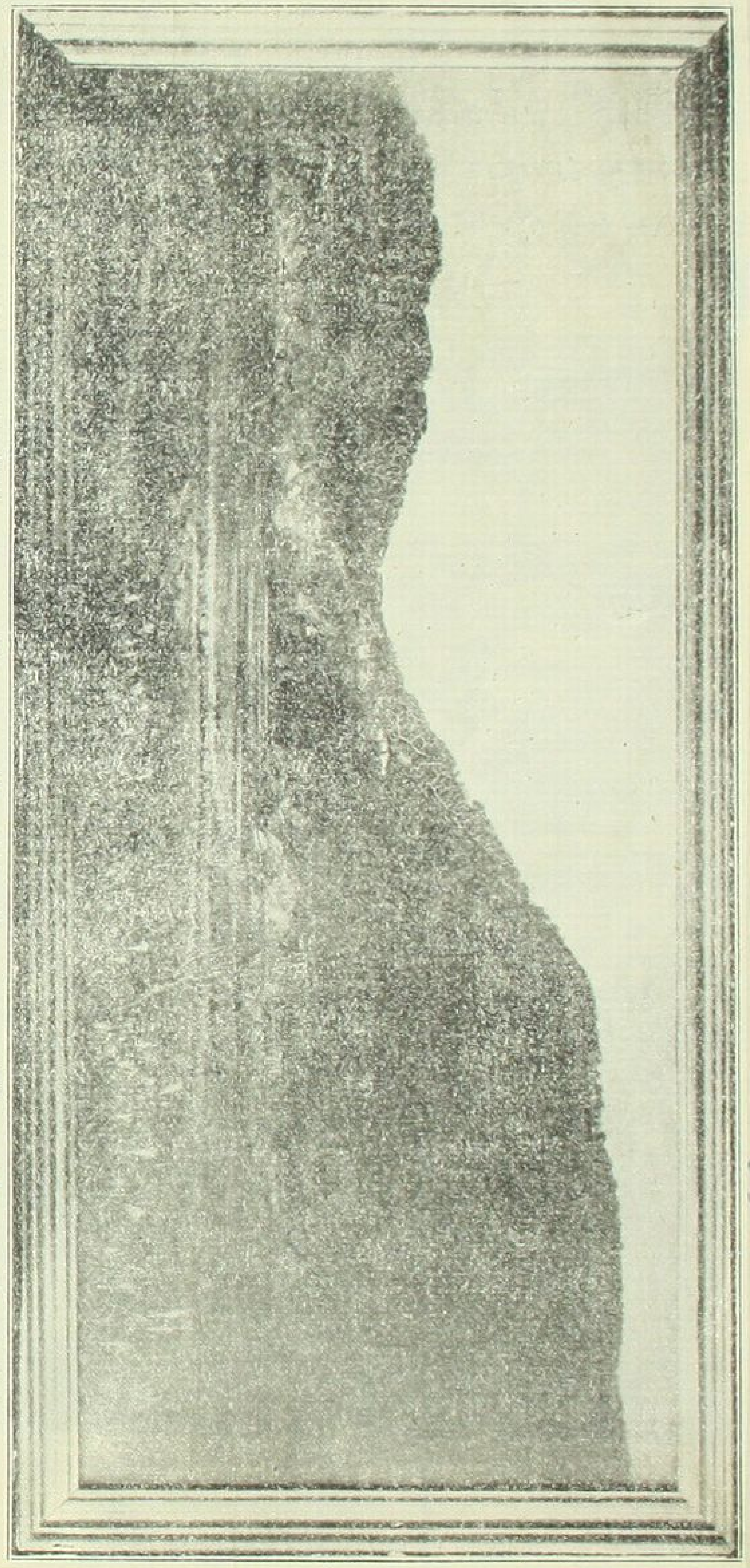


柳樹白鷺圖（社務所奥書院の襖）岸岱筆

え御らひ字積を見て図の段を述て御揮
毫を写き生花院を設くる等の委
事業をなさんとす結縁の為に必要
第三ハ御の意を以て久しく傳へられし
日の図をみるにかゝるあるも時々
ゐて海ゐんと直く流れを移して方
捨てゝくる

村牟礼といへる地あり柴野栗山生誕の地
なり一時栗山の幼年の頃柏木数出為
の川にかしめかさましてこれを枕にする所也和
字を換へて栗山の木像を去く一二遺墨
を存するのみ他に見るべきものなし去
つて屋島に行く途中源家軍門を構
への旧址あり豊碑を建てて其事績
を表す、屋島は木田郡潟元村にあ
り高松市を距る東方二里十六町遠く北
峰を望み北嶺屋根を地上より去くうしか
し故に屋島といふ（按ずるに讃州北部の山多

○琴平神社を拜し以て後の登道路を合
せんつ栗山島を一覧する方脈終りてまた東
に行き甲揚も見る栗山島を五剣山ひのや


琴平山圖 高橋由一筆（當宮什物）

し今またる所スニーレコシン明道篇に珍らしき傳
立備州道に於ても一型の山を見たりと為たるも
あるべしが尾路を盡し代ま也又されど西洋
當は河をわたりて来路と鳴るりあるの現状
なりしかれば路を毒か給へ（判） 山林なるも篋
興を催して行く山路精く險なるも思へし
ならずあるべき元松には横はりてなき
に眺めり、芳し而りが、やうやうして江子
海藤のなくて見え月はこよいのあるじなる
けるし」とは伴せる豊元の旅路なみえ来
うる程をなる早く山上に達す一旅亭に入

り勉めること風景元の佳絶のうちに眺山
る獅子巌あるも元ス躍して純眺するのは
男杵女杵と呼べるありき又見元を更
くなるとしく海上に遠く浮遊ありしもち大槌
小槌の岬あるも市の松低市しき玩具家屋
ことく羅列し湾内の白帆を白然に浮
かうを給へん風景まさに吹鎖跳を絶
也留して談古歌を携へてはいはむ境
の海を祝する北宮も海の不可四狭すなるを
前面は血剣山あるも守かれ田小蒼くんなる
風光（超大雪）一佳也但しいはゞ北宮の如く

塩田を差し海面に大に餘地を存せり然るに
く大利を生ずれど塩の浦を仰ぐ塩
田と化し去らん歎かはしき事の多かるのみ
増らしむるも也余此等の風光を祝して伐興
す新たなる田拵行の中村浜寄士（新居浜）
揚浜（桜木稲荷浜寄与）を勧めて見し
平家の又やひ男が此の風光眺望の
地を選びたるも今銭地となりたるも商あるも
高明の給ひの如き燦爛なる寓興をも
与へし此の明媚なる山水の間に移せ
其の壮観を見るべし是れぞ此地

こゝに来りてこそ平氏の跡ありしの偲ばるゝ
あらはるゝを知る後人又やひ男、此の自
然の風光に感じ宣興を携へし
浪人や歌を詠ずるもの遺跡を残すもの
皆風雅の志を表して実に
皆顕はれ利也源氏のあはれならず
平氏を知るを雅するを解したる語るべし
の勝中風光今のあはれ平家の跡なれ浜
の続くありてこそあれ也と
終に尾崎等に別れ続いて此等に帯びたる
く由緒ある名を記せし由来を知る

てまむきことあるまじき境に越ゆる所
謂ゆる雪の庵（庵内の土壁純白雪の如し
なる名つくし）を一読し其子に御座に就
く

鳩居堂製

以下全て

白　紙